

ようこそ最強のはたらない魔王軍へ！

～闇堕ちさせた姫騎士に魔王軍が掌握されました～

永松洸志



ファンタジア文庫

2963



勇敢なる

我が魔王軍の兵たちよ、
戦え！

六面の立方体を

その手に掲げ、

勝利を掴み取れ！

魔王

アーヴィン＝ロキアル＝レイジィ

プロローグ

「フハハ、よくぞきた勇者どもよ。さあ、我が腕の中で息絶えるがよい！」

同時に天窓の外で雷鳴が鳴り響いた。

魔王城、玉座の間。

玉座の前に悠然と立つ魔王は漆黒のローブを翻し、三人の戦士に向かって手をかざす。決まった……。仰々しく口上を述べた魔王——アーヴィンは内心で恰好をつける。

対する三人の戦士——安っぽいレザーアーマーを身に着けたオークたちは互いに豚鼻を突き合わせ「えっと……」「おい、言えよ」「セリフなんだっけ」とひそひそと相談し合っている。

やがて一人のオークが一步を踏み出し、手に持った斧を突き付けて、

「じ、邪悪な魔王め、その手に……手に……——あのすみません、セリフなんですっけ？」
オークは申し訳なさそうに後ろ頭を掻き、こちらに訊ねてくる。



作戦会議に
ゲームとダイスを
持ち込まないように。

魔王軍総司令官
シーナ=アルバート

アーヴィンは、ハアとため息を吐き、どかっと玉座にもたれかかった。

「あのな、さつき打ち合わせしたろ。『邪悪な魔王め、その手にかけた罪なき人々のため、ここで討たせてもらおう』だよ。つーか別にそういうのはノリでいいんだって。それっぽければいいの」

「えー」「おい怒られてんぞ」「俺のせい？」とプヒプヒと言いながらオークたちは肘を小突き合っていた。

そんな息の合わないオークたちを眺めながら、アーヴィンは二度目のため息を吐いた。せつかく集めたのにこれでは台無しだ。

無論、この三人のオークたちは別にアーヴィンを本気で討ち取りに来たわけでも、漫才をしに来たわけでもない。オークたちはアーヴィンの率いる魔王軍の兵士だ。

普段から修練場でトランプやらTRPGやらして暇なオークたちを集め、こうして勇者が来た時の予行練習をしていたのだが、肝心の勇者役がこの体たらくでは雰囲気が出ない。

「あのー、魔王様。これって何の意味があるんですか？」

「そうですよ」「せつかくTRPGのラスボスの戦闘途中だったのに」とぶーぶーと文句を垂れてきた。こいつらは何もわかっていない。

「何言ってるんだお前ら。本当に勇者が攻めてきたらどうすんだ。予行練習は必要だろう」

「魔王様、でもそれじゃあ、別に口上から始めなくても戦闘から始めればいいじゃないですか。模擬戦とか」「そーっすよ」「TRPGでいいじゃないっすか」

「それじゃダメだ」

「なんでっすか？」

「本番で噛んだら恥ずかしいだろ！」

「【……】」

何言ってるのこの人……。みたいな痛々しい目でこちらを見ないでほしい。いや、もし本当に勇者が玉座の間まで来て「覚悟！」みたいなことになった時、

「フハハよくぞ来た勇者ども、さあ我がう、腕の中で息絶えるがよい（裏声）」

みたいなことになったら台無しどころじゃない。勇者に同情されるとか、嫌すぎる。それでもって、仲間の僧侶に情けの回復魔法とかされたら恥ずかしくて自爆魔法でも唱えてしまいそうになる。

——それはさておき、アーヴィンはゴホンと咳払いし、

「じゃあ次、オレが負けた時のパターンやっから、戦闘は一旦パスして」

「え？」「わざわざ負けた時とかやるんすか？」「そろそろTRPGをやりに帰りたいんすけど」

「当たり前だろ。お前ら同人誌とかの読み物、読んだことねえの？」

「魔王様がよく読んでるやつっすか？」「あれ人間の国にしか売ってないんでしょ？」「前に魔王様から借りたやつなら読んだことあるっすけど」

王都製の読み物——その中でも絵と文字が一緒になつた読み物は『漫画』や『同人誌』と人間たちは言っていた。えっちなものも多いが、中には熱い魔王対勇者の読み物があつた。

「後で貸してやつから読んどけ。やられた時に『ぎよえー』とか『ぐふっ……っ！』とかそんなんじゃカッコつかねえだろ？ んで——そのあと勝った時のパターンもやつから」

「えー……」「まじすか」「帰りたいんすけど」

露骨に嫌な顔をされた。

やつぱりこいつら相手では雰囲気が出ない。そもそもオークを予行練習相手に選んだのは間違まちがいだつた。我が魔王領にはいないが、それこそ人間の姫騎士とか、冒険者とか——とにかく人間相手でないと盛り上がるがない。

どうすつかな、と思案していると、正面の大扉が重々しい音を立てて片方だけゆっくりと開いた。

入ってきたのは両手で抱きかかえられそうなくらいに小さなドラゴンだった。金色の鱗に小さな双角。ぱたぱたと小さく動く可愛い翼。玉座から大扉まで遠くて、姿しかわからないが、この城にドラゴンは一人しかいない。

アーヴィンの右腕——魔王補佐官のミトラⅡドランだ。

「あ、魔王様ここにいましたか」

こちらの姿に気づくと、ミニドラゴンのミトラは一生懸命に翼を動かして空中をゆつくりと飛びながらこちらに向かっていた。

「ようミトラ。なんか用か」

「はい、少し報告したいことが——というよりオークのみなさんと何してたんです？」

ちょこんと生えた小さな手を口元に当て、くりくりとした金色の瞳をこちらに向けるミトラ。

「ああ、ちょっとした予行練習だよ」

と言いつつアーヴィンは視線を逸らしてしまう。ミトラとは旧知の仲であるがゆえに、『勇者が来た時のために恥ずかしい思いをしたくないから練習しました』なんて言うのはこつ恥ずかしい。

とオークの一人がおずおずと手を挙げ、

「あのー、お忙しいなら俺たちは帰っていいですか？」

ミトラは何か用があると言っていたし、ミトラの目の前で予行練習をやる勇気はない。仕方がない。予行練習はまたの機会にしよう。

「ああ、もういいぞ」

と告げると「じゃあお疲れーつす」「お先失礼します」「はあ、もう最悪」とおのおの嬉しそうにぺこぺこお辞儀しながら帰っていく。あと三人目の奴、あとで覚えてろよ。

「――で、ミトラ、用ってなんだ？」

あ、そうでした。とミトラが小さな手をパンと合わせて、

「ワルドー山脈前線砦^{とろで}周辺に数名の人間の騎士を見たという連絡がありました。おそらく王都からの斥候^{せつこう}だと思いますが、一応砦の警備には様子を見るように、と通達しておきました」

「騎士？ 冒険者じゃなくて？」

騎士なら王都製の白銀のアーマーを着けている。十中八九、王都聖騎士団の騎士だろう。正規の斥候^{せつこう}だとすると厄介^{やっかい}だ。

「はい。それと警備兵の見間違いかもかもしれませんが、騎士の中に銀髪^{ぎんぱつ}の女騎士がいたそうです。もしかすると一番隊隊長のシーナ＝アルバートかもしれません」

「誰だそれ」

「王都では有名な姫騎士です。王族の血を引いていて、剣^{けん}の腕も立つとか」

そんな名のある姫騎士がわざわざ山を越えて斥候に来るはずがない。だとすればこれはただの斥候ではなく、少数精鋭^{せうえい}で砦を落としに來たのかもしれない。

「いかがします？」

ふむ、とアーヴィンは顎^{あご}に手を当て、一計を案じた後、すっと立った。

「些^ちにはオレが行く。万が一もあるから城の警備を強化しておいてくれ。最悪、交戦になる。援軍^{えんぐん}もいつでも出せるように手配しておいてくれ」

と命令を飛ばすと、ミトラはパツと明るい顔になって、

「さすが魔王様です！ かつこいいです！」

「じゃあ行ってくる」

とアーヴィンは背中に力を入れると、ロープの下から一對^{つい}の黒い翼が生えた。デーモン族^{しやうもんぞう}の象徴たる悪魔の翼。この翼さえあれば、馬で半日かかるような道でも一瞬^{いつしゆん}で飛んでいくことができる。

アーヴィンは床を蹴^けり、飛翔^{ひしやう}すると、天窓を開けて外へと飛びたつた。空は相変わらず曇天^{どんてん}のまま。いつ雨が降り出してもおかしくない。

援軍？ 交戦？ そういふのはどうでもいい。アーヴィンの頭の中にあるのはただ一つ。
（やっと本物の人間相手に対勇者の予行練習ができる）

第一章 やめときやよかつた

つい数時間前まで曇天だった空は一部、青空が見えていた。

「妙ね」

薄暗い砦の中を三人の騎士が歩いていた。その中で先頭を行くのは女騎士——シーナⅡ
アルバートだった。

腰まで伸ばした銀色の髪、しゅつと伸びる肢体、大人と呼ぶには若干幼さが残った顔つきをしている。だがそれでも成長期直後の立派な体をしていた。大きく実った胸に、腹部にはライトアーマー、細い腕にはガントレット、足にはグリーブを着けている。それぞれ魔法によりエンチャントを施しているため、見た目以上に装甲値は高い。

ここはワルドー山脈魔王領前線砦。東の人間の国——王都アーフィルと西の魔族の国を縦に二分する三千メートル級のワルドー山脈。その山脈より西の山の中腹に位置するのがこの魔王領にある前線砦だ。

王都聖騎士団に所属しているシーナ一行はこの前線砦の調査のためにやってきていた。

外から見た時もあったが、魔族の気配がなさすぎる。

廊下は薄暗く、明かりは一切ない。

ここは数千人程度なら収容できる中規模の砦のようだ。ただ外観も内部も手入れをしていないのか、ところどころ壁の石が欠けている。

「ふーん、どうやら無人のようだね。シーナ」

背後に控えていた男の騎士——スヴェン＝バルザットがゆっくりとシーナの肩に手を置こうとする。しかし、すぐにシーナはスヴェンの手を払った。

「やめてスヴェン。今は作戦行動中よ」

「つれないなあ、シーナ。僕たちは婚約者同士じゃないか」

長く伸ばしたさらさらの髪を手でバツと払い、仰々しくやれやれといった風に首を振るスヴェン。

それを見てシーナはふうとため息を吐く。スヴェンは別に悪い奴ではないのだが、こういうおちゃらけたところはあまり好きではない。婚約というのも、本人の希望というより、親が縁談を進めていたというところが強い。

スヴェンがプロポーズをしてきて、返事を保留している間に、親が勝手に縁談を了承していた。そんなことをされたら断れるわけがない。別に嫌いなわけではないし。

「それでどうします？ シーナ隊長。無人でしたって報告しに帰りますか？」

スヴェンの隣に立っていた仲間の女騎士マリナが口元に指を当て、言った。

「いえ、無人じゃないわ。見て」

とシーナは屈み込んだ。石の地面をゆっくりと撫でる。

「ここに足跡があるわ。ここにも——ここにも。大きさから言って、おそらくオークかトロール。しかも一匹や二匹じゃない。何十匹もここにいたはずよ。それに壁の松明——」

今度は立ち上がった壁掛け松明に手をかざす。

「ほんのり温かい。ほんの数時間前までここに魔族がいた証拠よ」

「ふむふむ、だからさっき『妙』だと言ったんだね」

スヴェンがしたり顔で訊ねてくる。

「そうね。敵はあたしたちに気づいていて誘っているのかも」

（だとしたらどうして中に入れたの？）

中に誘って逃がさないためだろうか。捕虜にして、王都の情報を得ようとしているのかもしれない。

ならばこのまま進むのは危険かもしれない。

少なくとも前線砦の調査としては十分な成果だ。砦を守っている魔族の種類や数はわか

らなかつたが、ここにいたるまでの順路、砦の内部や進入路までこと細かに情報を得ることができた。

撤退しよう——そう告げようとした時、スヴェンが何やら前方を指差した。

「あれは……扉だね。あそこまで見てみる？」

ところどころ縁の金属部分が錆びた木製の扉だった。手入れはあまりされていないようだ。

「……入ってみて危なかったら即撤退。いいわね」

シーナの確認に、スヴェンとマリナはこくりと頷く。

生唾を呑み込み、シーナはゆつくりと扉を押し開ける。

「んっ、かしい……」

ぎざぎざと金属が擦れ合う耳障りな音を立て、扉は開いた。

ボタンと扉を閉め、ゆつくりと見回す。

——中は思ったよりも広かった。長方形の縦長の部屋で、床には赤い絨毯が敷かれてい

作戦会議室か何かなのだろうか。だが部屋には家具らしい家具は何もない。

入り口正面には壁一面の格子状の窓ガラス。ガラスの前には一脚の椅子が——。

「誰!？」

シーナの発した鋭い声に、スヴェンとマリナはお互いに腰の剣を引き抜く。

ガラスの前の一脚の椅子。そこには足を組み、悠然と座る一人の魔族の姿があつた。

(デーモン族?)

逆光になっており、顔まではわからないが、姿は見える。

人間とほぼ変わらない体軀をした中肉中背の男。呑み込まれてしまいそうなほど黒いローブに身を包んでいる。一目見ただけでは、人間と変わらない。——だが人間と明らかに違う。

その背からは禍々しい漆黒の翼が生えており、頭にはこぼしサイズほどの二対の角が生えていた。

この容姿は魔族の中でも上位の存在。デーモン族に他ならない。

やはり待ち構えていた。

デーモン族の男が放つ鋭い殺気がシーナの肌に刺さる。ただ敵は座っているだけなのに、この威圧感は何だ? 額から冷や汗が流れる。

レイピアにかけるシーナの手はびくびくと震えていた。

デーモンの男はすっと立ち上がり、ローブを翻した。

そして第一声を放つ。

「フハハ、よくぞ来た！ 我が名はアーヴィンⅡロキアルⅡレイジイ！ 魔王だ！」

※

「フハハ、よくぞ来た！ 我が名はアーヴィンⅡロキアルⅡレイジイ！ 魔王だ！」

（嚙まずに言えた！）

口上をなんとか述べる事ができたアーヴィンの眼前には三人の騎士が立っていた。女、男、女。見たところ、王都聖騎士団の恰好をしている。それぞれ別に重装備というわけではない。女はライトアーマーとガントレットとグリーブだけ。男も比較的に軽めの鎧を着ている。

更に言葉を継ぐとした直前――。

「あなたは何者なの!？」

正面に立つ女騎士が声を上げた。

銀の長髪をした女騎士だ。若い。人間ならまだ十七か八くらいだろう。

せっかく盛り上がりがついていたのに水を差さないでほしい。それにちゃんと『魔王』と言ったのに、聞いていないのだろうか。

「あのなあ、魔王って言っただろ。一応この領地を束ねてるボスのアレなんだけど」

「そんな奴がここに居るわけないでしょ！」

真つ向から否定された。ひどい。

「お前たちがここに居るって報告があったから待っててやったんだろうが」

わざわざ見張りのオークたちを帰らせたりもした。もし戦闘とかになって、オークに負傷者を出したくなかったし、逆に騎士たちがオークたちに返り討ちに遭いでもしたら、せっかく待っていたかきもなくなくなるからだ。

「……シーナここは一旦引くべきだ」

男騎士が女騎士に耳打ちをしていた。どうやら正面に立つ女騎士の名前はシーナというようだ。

（ミトラの言った通りだな）

王都聖騎士団では有名なシーナⅡアルバート。人間の中で強いと噂される騎士。どれくらい強いのか少しは気になる。

戦闘もそうだが、その前にすべきことがある。

（さあ、どうするか……）

せっかく見つけた貴重な人間のリハーサル相手だ。魔王らしくカッコよく振る舞えるか、

三日三晩考えた戦闘直前の口上を嚙まずに言えるか、今から少し緊張——。

「逃げるわよ！」

（つて逃げるのかよ！）

シーナの号令で一斉に扉に向かって駆けだした。だが——。

「開かない！ シーナ、開かないぞ」

「いやだわ、シーナ隊長どうしましょう」

もう一人の女騎士と男騎士が扉をダンダンと叩いている。

（あー、そーいやその扉建て付け悪かったつけ？）

扉が歪んでいるため、たまにオークたちが全力を込めても開かない時があるらしい。

「くっ、謀ったわね！ 魔法で閉じ込めるなんて」

シーナがキッと睨みつけてくる。そんなことしてませんが。

「仕方ない……やるわよ、スヴェン、マリナ！ 相手は幸い魔族一体、あたしたちでも勝てるはずっ」

シーナはレイピアを抜き放った。どうやら戦う気になったらしい。

なんだか釈然としないが、戦うのならこちらでも手加減できない。

ただ派手な魔法を使うわけにはいかない。なにせ、この砦は百年前から改修らしい改修

をしていない。つまり老朽化が進んでいて、ちょっとした衝撃でも崩れかねない。

本当は前からミトラに『改修した方がいいですよ』と言われ続けていたが、『いやめんどくさい』と断り続けていた。

なので、今回は魔法ではなく、剣で戦わせてもらう。

アーヴィンは虚空に黒い渦を発生させ、そこに手を突っ込んだ。

超簡易式空間転移魔法だ。離れた場所の物質を直接この場に持つてくることができる。

ただし生き物は転移不可能で、こちらから送ることもできない。

アーヴィンは黒い渦から、一振りのブロードソードを取り出した。

これは先週、人間の国の王都まで変装して遊びに行った時についてきたものだ。武器屋のおっちゃんは『これで斬れないものはねえ！』と豪語していたから、その後、城で切れ味増加の魔法エンチャントをかけてやった。

まだ試し斬りはしていないが、おそらく鉄くらいなら斬れるだろう。名付けて『魔剣アーヴィンソード』。

「行くわよ！ スヴェン、マリナ、援護をお願い！」

先んじてシーナが突っ込んできた。低く腰を落とし、弩から放たれた矢のごとく、レイピアの一突きを浴びせてくる。

(あぶね！)

アーヴィンは翼を使って大きく後方に飛びのく。

しかしシーナは休まず、一步で再び間合いを詰め、レイピアの一突きを繰り出す。

「ちょちょっ！ タンマタンマ！」

今度はアーヴィンは、手に持っていた魔剣アーヴィンソードでレイピアの一撃を力の限り払いのけた。

一瞬体勢の崩れたシーナは無理せず、アーヴィンから距離を取る。

「あぶねーな、髪の毛ちよっと切れ——あーっ！」

斬られた髪の毛の端を触って気付いた。ローブの襟のところが少しだけ斬られている。先ほどの刺突の時だ。体は斬られなかったが、ローブが犠牲になってしまったようだ。

「くっそー、これ結構高いんだぞ！」

まあ着られなくはないし、あんまり目立たないから、貰われるよりマシだ。けど気になっってしまう。

アーヴィンがちらちらと切れ端を気にしていると、シーナが「くっ」とこちらを睨みつけ、

「あたしをバカにしているの!？」

「これでも結構マジなんだがな」

「でもあたしの一撃をかわした……。あんただの魔族じゃないわね」

「魔王だつったろ。ちゃんと話は聞いてとけ」

実際、アーヴィンの動体視力と反射神経があつたからこそ避けられた。並の魔族なら初撃でやられていただろう。

シーナが目を細め、レイピアを構え直す。

「いいわ……次は討つ」

(マジモードかよ)

正直に言ううと剣術は苦手だ。先ほど以上の刺突を無傷で受けられる自信はない。

(傷つきたくねえし、でもかと言って魔法はな……)

老朽化の進む室内で大きな魔法は——。

「シーナ、離れて！ 僕の魔法で——っ」

男騎士の声にシーナが横に飛びのく。

「え？ お、おいちよっと待て、派手な魔法は——」

遅かった。短い詠唱の後、男騎士とアーヴィンの間の空間に小さな爆発が連続して巻き起こる。徐々に爆発がこちらに迫ってくる。

(よりによって爆発魔法かよ！)

人間の魔法はあまり知らないが、これはマズイ。かといって受けるわけにはいかない。「他人の領地だからって好き勝手しやがって……っ」

アーヴィンは魔剣アーヴィンソードで空間を薙ぎ払い爆発をかき消そうとした。しかし直前、ひと際大きな爆発が目の前で起こり――。

ゴゴゴ……。

まるで地震でも起きたかのように細かい震動が部屋を揺らした。

「な、なんだ！」

魔法を放った本人は何もわかっていないようだ。もう一人の女騎士は「きゃあつ」と頭を抱えて、その場にうずくまっていた。

「な、なに――えっ？」

シーナは天井を見上げる。

ぴし……ぴし……天井の一部に亀裂が入る。老朽化した砦にそんなひびが入ったら天井を支えられるはずがなく、アーヴィンの周辺の天井が音を立てて、無残にも崩れ落ちる。

「きゃあああああ！」

近くにいたシーナが悲鳴を上げ、頭を覆った。

「ち、仕方ねえな」

このままではシーナまで瓦礫の下敷きだ。いくら相手が敵である王都聖騎士団とはいえ、自分の領地で人死を出したくない。

アーヴィンは手をかざし、シーナを中心に球形の魔法障壁を張った。降り注ぐはずだった瓦礫は障壁に阻まれ、近場にがらりと落ちていく。

埃が混じった土煙が部屋を覆う。視界がほとんど遮られている。

「けほけほ」

アーヴィンは思わず土煙を吸ってしまう。シーナを守ることを優先したため、自分に張る魔法障壁を忘れていた。おかげで腕に瓦礫がいくつか直撃し、痛い。この程度で死ぬほどやわじやないが、ジンジンする。

土煙が収まり、視界が晴れると、アーヴィンは惨状を見てため息を吐かざるを得なかった。

「こりやひでえ」

瓦礫によって部屋が入り口側と窓側に完全に分断されてしまった。こちらからでは向こうにいる男騎士と女騎士の姿が見えない。

それに天井だけでなく、壁にもぽっかりと穴が空いて、風が吹き込んでくる。周辺の森

が中からはつきりと見える。

「ううん……」

一瞬気を失っていたらしいシーナが、ゆっくりと体を起こした。

こちらの姿を視認すると、再びレイピアを突き付けてくる。こんなことになっても戦意があるのはさすが誉れある姫騎士と言ったところか。

——まだやる気か。と言いかけたその時、

「大丈夫かい？ マリナ」

男騎士の声だ。と同時にもう一人の女騎士の声も聞こえてきた。

「はい、私は無事です。スヴェン様は無事ですか？」

どうやら男騎士はスヴェン、女騎士はマリナというらしい。

「心配ないよ。君が無事でよかった」

「でもシーナ隊長が瓦礫に……大丈夫なのでしょう？」

「ふっ、心配ないさ。爆発からは離れていたし、聖騎士団御用達の耐衝撃エンチャントライトアーマーもある。多少怪我を負って気絶しているかもしれないけど、死んではないさ」

「でも……痛っ」

「足をひねったのかい？ 僕、薬水があるから——ちょっと染みるよ」

「きゃ——ありがとうございます。スヴェン様」

……どうやら瓦礫の向こう側では男女のいちゃいちゃが繰り広げられているみたいだ。一方的に男から言い寄っているようにも見えるが、女の方も満更ではなさそうだ。

「え？ スヴェン？」

こちらにレイピアを向けていたシーナも、どうやらあちらの様子が気になるようだ。瓦礫の間にできた隙間から顔を覗かせていた。

アーヴィンもどこかに隙間がないか探し——指二本分空いている空間があった。そこから向こうの様子を見る。

倒れたマリナを抱きかかえるように、スヴェンが片膝をついていた。そこだけを切り取るとまるでヒロイックファンタジーに出てくるような男女だった。こいつらうちの領地に何しに来たんだ。

「私は大丈夫ですから、シーナ隊長を早く……」

「無理しないで。シーナは大丈夫だよ、きつと。あの痛い魔族もさっきの落盤で死んだだらうし」

男の方はシーナのことを全く心配していない様子だった。それよりも誰が痛い魔族だ。

誰が。

「スヴェンどうして助けに来ないのよ」

隣^{となり}ではシーナが怪訝^{けげん}な顔をしていた。

「スヴェン様、ダメです……。今はこんなことしてる場合じゃ……それにスヴェン様にはシーナ隊長という婚約者^{こんやくしゃ}がいるではないですか」

「ふふ、いいんだよ。身持ち^{かた}が堅くてやらせてくれない彼女と違って、君の方がかわいいと思うよ。だから、いいだろ？」

「ダメ……スヴェン様、んっ」

半ば強引^{こざいん}にスヴェンはマリナへとキスをした。

「——っ！」

シーナが驚いたように体をびくつと震わせた。

——なるほど、読めてきた。

スヴェンと、ここにいるシーナは婚約者同士らしい。そしてマリナはスヴェンの愛人ということらしい。見た目押しが弱そうな彼女だから付け入られたのだろう——自分は、自分の領地の砦^{とりで}で何を見せられているのだろうか。

「そんな……スヴェン……どうして」

シーナが瓦礫^{がれき}にもたれかかったその時——。

不安定だった瓦礫の山ががらと再び崩れ出した。

「きゃっ」

「マリナ、僕の後ろに」

天井近くまで積みあがっていた瓦礫はあっさりと崩れた。壁になっていた瓦礫がなくなり、お互いの姿がはっきりとわかるようになってしまった。そしてスヴェンさんはちゃっかりと紳士ポイント^{しんしーぽいんと}を稼いでいるご様子だ。

シーナの姿に気づいたスヴェンとマリナは、ハッと慌てて距離を取った。

「どういうこと？ スヴェン、今、マリナとキスしてなかった？」

ゆらつ、と放心状態のシーナが抑揚のない声でスヴェンを問い詰める。ちょっと怖い。

「い、いや違う。これは彼女の顔に傷があったから看^みようとしただけで……」

見苦しい言い訳をするスヴェン。シーナは「嘘っ」と声を張り上げ、

「さつき、あたしはやらせてくれないって言って、マリナとキスしてた！」

「っ」

スヴェンの額^{ひたい}から冷や汗^{あせ}が流れ落ちる。だからなんで自分の領地でこんなドロドロした何かを見せられなくてはならないのだ。

「スヴェン答え——あうっ」

シーナが瓦礫を乗り越えてスヴェンに詰め寄ろうとした時だった。

崩れた天井からこぼしサイズの瓦礫が落ちてきて、シーナの後頭部にクリーンヒットしてしまった。シーナはそのまま瓦礫の上に俯せに倒れてしまった。気絶したのだろう。

「——に、逃げよう！」

スヴェンがとつさに叫ぶ。「えっ」とマリナ。「でもシーナ隊長は」

「まだそこに魔族が生きてる！ さあ早く！」

「おいちよっと待て、この姫騎士も持ってけよ！」

とアーヴィンは言い掛けるもスヴェンは無視。

困惑するマリナの手を取って、爆発魔法で壁に空いた穴から外に飛び出して行ってしまった。ここは一応二階だが、耐衝撃のエンチャントがかかった鎧ならその程度の衝撃で足をくじいたりはいしないだろう。

「……どうすんだよ、これ」

視線を落としたアーヴィン。そこには未だ起きないシーナが倒れたままだった。

（ほっとけ、ないよな）

ハア、とため息を吐くしかないアーヴィンだった。

魔王城。賓客用の寝室。

レースカーテンの付いたダブルベッドに、木の香りがする古風なカバノキの机。ドレッサーにクロゼット。床には埃一つない、赤い絨毯が敷かれている。

薄いカーテンがかかった窓ガラスからは夕方の斜光が部屋に降り注いでいる。

さながらここは王族の姫様の部屋だ。城のメイド係であるラムアたちが毎日掃除してくれているため、いつでも綺麗である。

姫様——と言えるのか、ベッドの上には眠れる姫騎士が仰向けになっていた。額にはアーヴィンが置いた濡れタオルがある。

机から椅子を引っ張ってきてアーヴィンは側で姫騎士——シーナを眺めていた。

さすがに人間とはいえ女性を着替えさせるわけにもいかず、土煙で汚れたライトアーマーのまま寝かせている。

メイドラムアに頼んでもよかったが、その場合「どうして人間が魔王城に!？」という疑念をいちいち晴らすのが面倒くさかった。

（気持ちよさそうに寝がって）

すー、すー、と静かな客室に寝息が響く。

それにしても綺麗な顔立ちだ。先の戦闘で多少、顔は汚れていたが、それでも十分に美しいと思えるくらいに、整った顔だ。

人間の世界はよくわからないが、聖騎士団の中でもモテたのかもしれない。あのスヴェンというたらし以外にも結婚の申し込みとか、あったのだろうか。剣の実力もあるから、同性からも人気だったのかもしれない。

ぬるくなった濡れタオルを新しいものに替える。床に置いた桶の中には、水と氷結魔法で生成した氷とキンキンのタオルが入っている。

「う……うん……」

シーナの眉間がびくつと動いた。ようやくお目覚めか。シーナがうつすらとおぼろげに臉を開いていく。

「ここ……は？」

あたしは誰？　と言われたらどうしよう、などと心配しつつ、アーヴィンは天井をぼんやりと眺めるシーナに声をかけた。

「ここは魔王城。オレの城だ。んで、お前はワルドー山脈の前線砦で気絶して、ここに運ばれたってわけ」

矢継ぎ早に喋ってしまったが、ちゃんと脳に届いただろうか。

「まあ……しろ？　あたし、なんで気絶して……」

ゆつくりと上体を起こすシーナ。頭を手で押さえていた。まだはっきりしない様子だ。

「覚えてねえか？　お前、うちの砦に来てたろ。確か……スヴェンとマリナとかいう騎士と一緒に」

「スヴェン……マリナ……っ！」

その名を口にした途端、シーナはカッと目を見開き、

「そう、そうよ！　スヴェンは!?　マリナは!?　あの二人キスしてた！　なんで!?　あの二人、どこに行ったの!？」

覚醒はしたが錯乱しているようだ。

「あいつらならお前を置いて逃げたよ。たぶん浮気が上にバレるのが嫌だったんじゃないか」

「うそ……嘘よ！　スヴェンがあたしを置いて逃げるなんて!？」

アーヴィンはシーナの肩に手を置き、

「落ち着けて、なんか見捨てられたみたいだぞ、おま——」

パンっ！　と悪意をもって手を払われた。さらに被っていた掛け布団をこちらの顔に投

げつけてくる。

「うぶっ！ おまつ、なにしやる！」

アーヴィンが布団を手で払いのけると、シーナはいつの間にかベッドの反対側に立っていた。

「あんた、よく見たらあの時のデーモン族ね。あたしに何したの！」

「何もしてねえよ。つてかお前、まず感謝しろ。砦で瓦礫の下敷きになりそうだったのを助けてやったんだぞ」

「そんなの頼んでない」

そりゃあ向こうからしたらこちらは敵だ。人間界の教育では子供の時から魔族は敵、悪倒すべき存在と言われてきている。児童向けの英雄譚も大抵、悪い魔族を討伐するものばかりだったはずだ。

だが、こうして真つ向から理由もなく拒絶されるのには、少々、怒りを覚える。

「とりあえず落ち着け、な」

アーヴィンは回り込んで、シーナをなだめようとする。ただ錯乱しているだけかもしれない。しかし返ってきたのはシーナのミドルキックだった。グリープ越しの蹴りがヒットした



アーヴィンは吹き飛ばされ、仰向けになる。

「お、おま……誰が介抱したと思って」

ちよつと痛い。さすがに金属で蹴られると吐き気までしそうになる。

「魔族の施しなんていらなわい！」

手に持っていた濡れタオルを、アーヴィンの顔に叩きつけてくる。

ブチッ。

「そこまで魔族が嫌いかコノヤロー！　そうか、そうですか、わかりましたよオ！　じゃあお前に本当の魔族つてやつを教えてやる！」

「やってみなさいよ！」

ならやってやる。

アーヴィンは空中に黒い渦を発生させ、中からエンチャント付きの鎖を取り出し、シーナへと投げつけた。

「さあ！　何よこれ！」

まるで生きた蛇のように鎖はシーナの体に巻き付き、全身を縛り上げた。

「フハハ！　拘束用魔具だ。人間の力じゃほどこまい！」

「離しなさい！　このコウモリ魔族！」

ひどい暴言だ。それも含めてその体にたつぷりと教え込まなければならぬ。

アーヴィンはシーナに巻き付いた鎖をひょいと手でつまみ上げる。

「どこに連れていくつもりよ！」

「お前に魔族の恐ろしさつてやつを思い知らせてやる」

シーナを連れて、アーヴィンは部屋から出て行った。

床も壁も無機質な冷たい石で覆われた部屋。明かりは壁にかけられた松明だけで、それ以外の光源はない。

ここは魔王城の地下牢。風は一切通らず、じめつとした空気が蔓延している。部屋の隅は苔生しており、檻の鉄格子は錆びだらけだ。

その牢の中央——天井から両手を鎖でつながれた姫騎士が立っていた。もはやこうなつては抵抗もできないだろう。

「くっ、あたしをどうするつもりよ！」

じゃらじゃらと鎖が音を立てる。

これから何をされるかわからない恐怖と興奮からか、シーナの頬はほんのり朱に染まり、

荒々しく肩で息をしている。

「仕置きをすると言っただろう。ふっふっふ、地下牢、姫騎士ときたらやることはわかるよな？」

「な、なにを……」

「決まってるだろう。闇堕ちさせて我が魔王軍に引き入れてやる！」

「や、闇堕ち……?」

「そうだ」

「——ってなにそれ？」

ガクッ。

思わず崩れ落ちてしまった。知らない？ 姫騎士として生を受けておきながら、闇堕ちをご存じない？

「お前も読み物くらい読むだろ？ ほら、城下町で売ってる同人誌とか」

同人誌。一般的には絵師の描いた絵にセリフを付け冊子にしたものだ。それを専門の魔術師に頼み、複製魔法で絵を複製し、製本している。

時折、アーヴィンは暇を見つけては変装して城下町で同人誌を買いあさっている。

その中の一つに『姫騎士の闇堕ち本』なるものがあり、薄暗い地下牢で高圧的な姫騎士

にあんなことやこんなことをして、心を堕とし、魔王に服従させるというものだった。

——まさにこのシチュエーション。だが、当の姫騎士は、

「読み物は読むけど、同人誌って薄汚れたいやらしい書物でしょ!? そんなの読むわけないじゃない！」

などこれから自分の身に起きることがわからない様子だ。なんだか本で読んだようなイメージと違う。

アーヴィンが読んだ同人誌では二パターンあり、一つは『いや、やめてこないで!』と恐怖におののき、やがては快楽に身を任せるパターン。もう一つは『くっ殺せ』と毅然とした態度を取るも最後は『従いまひゅ〜』と堕ちるパターン。

「——ってなにそれ？」と真顔で言うような同人誌はなかった。

仕方ないのでアーヴィンは説明した。

「闇堕ちってのは、簡単に言うと、お前を魔族にして、魔王軍に寝返らせることだ。お前の心が堕ちれば後はオレが淫紋を刻んで魔族にできる」

「あたしを魔族に……?」

「そうだ。魔族はいいぞ。人間なんかより怪我が早いし、魔力は多い、身体能力も飛躍的に伸びる。元々凄腕の剣士なら、その実力は数十倍も伸びるだろうな。そうだな

……闇堕ちさせた暁には、その力を使ってへとへとになるまで働かせてやろう」

せっかくだから軍を纏める仕事をしてもらおう。シーナは元々王都聖騎士団でも隊長を務めており、部下を纏めることくらいはやっていたはずだ。

あの纏まりのないオークたちをシーナに全部丸投げして、自分は部屋でお菓子を食べながら同人誌でも読んでおこう。我ながらいい案だ。

「そんなことするわけないじゃない！ あたしを寝返らせる？ ふざけないで、誰が魔族なんかに！」

「そんな強がりもいつまで言っていられるかな？」

同人誌では『快樂堕ち』と言って気持ちよくなったところで、すんなりと服従していたが、実際のところは少し違う。

服従の義と言って、下腹部に淫紋と呼ばれる紋章を刻み付けることで闇堕ちが成立する。厳密には同人誌の闇堕ちとは性質が違う。ただ刻むだけでは成立しない。心を堕とす必要がある。

アーヴィンはパチンと指を鳴らした。

するとあらかじめ呼んでおいた三名のオークたちがぞろぞろと地下牢へと入ってくる。

「な、なによ……」

巨漢のオークに圧倒されてか、シーナの表情に曇りが見える。額から汗が流れているのが肉眼でもはっきりと見える。

「あの、なんか用っすか魔王様」「さっきまで寝てたんすけど」「だる……」なんだか三人とも腑抜けた感じだ。どうしてもっとやる気を出さないのか。

「わかるだろ？ お前ら。地下牢、姫騎士、オークときたらやることは一つだ。さあやれ！」と手をかざして命令するも、三人のオークはそれぞれキョトンとごつい首を傾げる。

「は？」「えっと……」「ちょっと何言ってるかわかんないっす」

こいつら正気か？

こんな絶好のシチュエーションは他にないぞ。

オークにとつては垂涎もののシーンのはずだ。だがいちいち説明しないとわからないなら仕方ない。

「今からこいつに仕打ちをするんだ。こいつは姫騎士、お前らはオーク、つまり——わかるだろ？ ちょっとこいつの、む、胸とかそういうのを触って気持ちよくさせるんだよ」

言ってて恥ずかしくなった。それに気づいたオークたちは、

「なんか顔赤くないすか魔王様」「なんかちよっとチキってません？」「ああそういうことっすか」

なんでこっちが恥ずかしがらなければならぬ。

「いいからやれ。これは罰なんだからな」

へいへい、とオークたちはシーナへと向き直る。

びくっと一瞬、体を跳ね上げさせたシーナは、ようやくこれから何をされるのか察したらしい。

「い、いや……こ、来ないで」

涙目になってオークを見上げていた。じゃら……と空しく鎖が音を立てる。

………なんだか罪悪感が芽生えてきた。やつてはいけないことをやっているような気がする。

だがこれは仕打ち。

生意気な口を叩いたシーナへの仕打ちなのだ。決してやましい気持ちがあつてやっていないのではない。

オークの一人がシーナの鎧に手をかける。「ひっ」と明らかに恐怖している声がシーナの口から洩れる。

——とその時、オークたち三人が申し訳なさそうにこちらに振り返った。

「あの……魔王様、彼女嫌がつてるじゃないですか」

「……え？」

まあ確かにそうだろうけれども。

「嫌がつているのに無理やりいたずらするつてのは、ちよつと……」「俺、母ちゃんから相手の嫌がるようなことはするなつて教えられましたし」「そうそう、魔王様には罪悪感つてものがないんすか？」

お前らオークだよな？

アーヴィンは指先でぱりぱりと頬を掻き、

「ま、そりゃ……オレも、多少はあるけど……つてかお前ら、こういう場面で興奮とかしないのか？」

少なくとも同人誌のオークは『ぐふふ……』とか下卑た笑い声をあげて、ノリノリで姫騎士にいたずらをしていた。

「興奮？」「いや……」「するわけじゃないじゃないですか」

「しないの!？」

オークだよなあ!?

「じゃあ逆に聞くんすけど、魔王様は女オークや女ゴブリンに欲情つてしますか」

「………しないな」

妙に納得してしまった。つまり美的感覚の違いということか。言われてみれば、百年と少し生きてきたが、オークたちが人間の女を襲うなんてことはなかった気がする。

同人誌でのオークがあまりにもリアルだったから、つい勘違いをしてしまった。

「ふう……」

シーナとアーヴィンはほぼ同時に安堵のため息を吐いた。「え？」という怪訝な目でシーナに睨まれたが無視だ。

ま、まあ失敗してしまったものは仕方がない。気を取り直して別の案を試すとしよう。何も闇堕ちにオークが必須というわけではない。

要は快樂堕ちをさせればいいのだ。とりあえず心が服従すれば実際は何でもいいが、快樂が一番簡単な方法だろう。

「来い、キラーアイ！」

と叫ぶと『そいつ』はやってきた。

「ひいっ」

シーナが牢の外側——鉄格子辺りの地面にいる『そいつ』を見て小さな悲鳴を上げた。石畳の床の上に、巨大な目玉があった。人の頭くらいはあるだろう。その目玉からはい

くつもの触手が生えていた。いうなればそいつは魔法生物。魔族と違って普通の生殖で生まれてきたわけではなく、魔王軍が誇る魔道研究所で誕生した人工的な生き物だ。

この触手を使って今度はシーナを快樂堕ちさせてやろう。

魔法生物——キラーアイが地下牢の壁を這いずり、天井に達し——丁度シーナの頭上で止まった。

うねうねとした触手がシーナの眼前にたらんと垂らされる。

「ひっ」

生理的に受け付けないのだろうか。オークを見た時とは別の意味で震えているようだ。ぬめぬめとした触手がびたつとシーナの頬に触れた。

「ひい……」

ぞわぞわ、とシーナが鳥肌を立てる。これだけで十分効果がありそうだ。

キラーアイを必要以上に怖がっているようだが、彼は別にそんなに怖い存在ではない。本来のキラーアイの仕事は偵察任務にある。

目玉から小さな目玉を生み出し、それを遠方に配置することで、遠くの景色や情報を直接この場に映し出すことができる。

これはとても便利なもので、例えば王都に放っておけば、新刊の同人誌が出た時などに

はすぐに買いに行くこともできる。

「魔道研究所が造り出した魔法生物キラアイだ。さすがのお前も何をされるか理解したらいいな？」

うにゆうにゆうと蠢く触手。シーナの目はその触手に釘付けだ。

「やつやめ……」

「わかつてるなキラアイ、その触手でシーナを悦ばせてやれ」

と命令すると、OK、という意思表示でキラアイが触手の一本をグツと立てた。意外と愛嬌のある奴だ。

「いや！ やめて！」

嫌がるシーナ。しゅるしゅると触手がシーナの艶めかしい体を這い回り、やがて数本の触手がインナーの中へと入っていく。

うん……まあ、これくらいなら仕打ちとしては十分だ。やつぱりオークにやらせるのはちよつと気が引ける。

インナーに侵入した触手はシーナの胸、腰へとたどり着く。服の上からでも形が変わるのがわかるくらいに揉み回されているようだ。なんだか、見ているこっちが恥ずかしくなりそうだ。

さすがにここまでされると、いくら強情なシーナとはいえ――。

「ふ、ふふ……あつはつはつは！ ひーっひっひ、いや、やめ……あつはつはつは！」

……なんか彼女、笑ってない？

涙目だった彼女が本当の意味で涙目になって体をよじっていた。

「や、やめ……っ、これっ、こそばゆ――、いーっひっひっ」

なんだか思っていたのと違うが、仕置きとしては十分に効果を發揮して――いるのだからうか。

「よし、一旦やめろ」

と命令すると素直にキラアイはシーナの服の中から触手を引き抜いた。撫で廻されたからか、シーナの服が少し着崩れていた。

「はあ……はあ……」

解放されたシーナはぐったりとしていた。意外とダメージがあつたようだ。

「どうだ？ 服従しようって気になったか」

と訊ねるとキツと睨み返された。

「誰が！ あんなことしておいて！」

あまり効果はないかもしれない。

拷問なら意味はあるが、これでは敵愾心を煽るだけだ。こそばゆいのであなたに従いますは何か違う。

頭上ではキラアイが申し訳なさそうに、触手をしゅんと垂らした。いや君は悪くない。ちよっと人間の体の構造をあまり知らなかっただけなんだ。

——だが、困った。

いつの間にか隣ではオークたちが床に座り込んで、トランプで遊んでいた。こいつらは頼めないし、闇堕ちさせるのが難しくなってきた。

こちらが手詰まりなのを察したのか、シーナが「ふんっ」と意気揚々と鼻を鳴らした。

「魔族っていうのも大したことないわね。こんな人をくすぐる程度の魔法生物しか造れないの？」

魔族に対してだけでなくキラアイをもなじるなんてひどすぎる。この子は意外とナイーブなんだぞ。

そんな無能発言に怒ったのか、自分の力を見せつけるように、突如キラアイの目玉が光を発した。

その光を壁へと投射すると、そこにはレンガ造りの街並みが映し出された。これはキラアイの子機が見ている王都の風景だ。

「これ……どういうこと？」

シーナがその風景を見て、驚いていた。無理もない。キラアイのことは人間には知られていない。こんな諜報活動が平然と行われていたと知られたら、子機が一斉に駆除される最新刊の情報が得られなくなってしまう。

「ここアルカティアの街……？」

どうやら映像の中のことについて驚いていたようだ。

アルカティアの街。一度行ったことがある。ワルドー山脈東のふもとにある大きな街だ。

——見たところ、子機はどこかの路地裏のゴミ箱の上にいるようだ。狭い路地から表の大通りが映し出されている。馬車やコート姿の紳士淑女が街を行き交っている。

やがて子機はレンガ造りの壁を上り、三階か四階のベランダへとたどり着いた。大窓から部屋の一室を覗いている。

映された部屋は簡素なワンルームだった。どこかの宿だろうか。ダブルベッドにサイドテーブルに机。目立った家具はそれくらいしかない。

壁には王都製の剣と鎧が立てかけられている。

そのベッドの上に一組の男女が座っていた。こちらに背を向けているが——この後ろ姿には見覚えがある。

「っ！ スヴェン！ ……マリナ？」

砦にいた男騎士と女騎士だ。

砦で逃げられてから、だいたい半日くらい経っている。その間に街まで戻って宿を取ったのだろう。二人は鎧を脱いでインナー姿でいた。

ガラス越しに声が聞こえてくる。

『シーナ隊長、本当に大丈夫なのでしょう？』

『ふふ、あの状況であの魔族がいたんだ。殺されているか——最悪拷問だろうね。罪悪感でもあるのかい？』

『はい……もつとどうにかできたんじゃないかって……』

『スヴェン、なんで……』

シーナがぼつりと呟く。

婚約者が死んでいるかもしれないのに、このスヴェンという男はなぜここまで冷酷にシーナを切り捨てられるのだ。

『スヴェン様はどうしてシーナ隊長と婚約を結んだんですか……？ その様子じゃあまり好きじゃないように見えますけど』

『ふっ、別に嫌いじゃないさ。あんな性格じゃなかったら、もつと可愛がってあげたんだ

けどね。ただ彼女はあのダリウス団長の娘だ。騎士団で出世するには何かと便利だったしね。彼女がクソ真面目だというのは本当に参ったけどね。キスもさせてくれないし』

『そうだったんですね……あの、気になったんですけど、シーナ隊長とはどういう出会いだったんですか？』

『簡単さ。半年ちよつと前に彼女、山賊討伐の任務に行って失敗したんだ。山賊に殺されるかもしれないってところで、僕が登場。その場にいた山賊を追い払って、シーナを助けた——なかなかドラマチックな展開だろう？』

『へー、そんなことしてたのか、お前』

アーヴィンは話を聞きながら、シーナをちらつと見た。

『……あれは、あたしが油断してたから。一步間違えればスヴェンだって危なかった』

どうしてこんな男と婚約なんてしたのかと疑問に思っていたが、どうやらシーナにとってスヴェンは命の恩人らしい。

『まあ当然、山賊っていうのは僕が雇った奴らだけどね』

『っ!』

スヴェンの言葉を耳にして、シーナが大きく目を見開いた。

『そうでもないよ彼女、僕に全然心を開こうとしなかったからね。まあその後も何度も

アブローチしてようやく、さ。けどキス一つさせてくれないし、こうしていなくなってくれたのは幸いかもしれない。今から団への報告を考えておかないとね。——そうだな、シーナが僕らを逃がすために囷おとりになった……。こんなんでどうだろう」

「嘘うそよ、嘘！ スヴェンがこんな……。あの時も、全部……。そんな……」

映像ではスヴェンがマリナにキスを迫せまっていた。マリナも断り切れないという感じでそれを受け入れていた。

よくもまあ、スヴェンとかいう男もここまで割り切れたものだ。すぐに別の女に鞍替くらがえするとは——もしかすると日常的に浮気うわきをしていたのかもしれない。

「あなたの魔法でしょ！ これ！ あたしに幻覚魔法げんかくまほうを見せているんだわ！」

シーナがこちらを睨にらみつけてくる。そんなわけがない。キラアイが勝手に映した映像だ——もしかしてキラアイはこうなるのがわかって映したのか？

「こんなの幻覚よ。あんたが作り出したげん——」

言いかけて、シーナの言葉が詰まる。映像を見て固まっていた。どうしたのだろうと、アーヴィンもつられて映像を見る。

マリナをベッドに押し倒たおすスヴェンの姿。この映像の窓ガラスからではスヴェンの背中しかわからない。

「あのハンカチ……」

「ハンカチ？」

スヴェンのズボン——そのお尻しりのポケットに一枚の黄色い布の一部が見える。「あれがどうかしたのかよ」

「あれ……先月あたしが誕生日にあげたもの。そんな、じゃあこれ……」

これが現実だと受け入れたのだろうか。

と、その時だった。

シーナの体から黒い霧きりが発生し始めた。これは瘴気しやうきだ。上級魔族なら誰でも体に有しているものだ。

闇堕ちというものを成功させるには、シーナの心を堕おとす必要がある。その際に心が堕ちた証明となるのがこの瘴気だ。人間がこれを出したということは、心が絶望し、堕ちたということだ。

「やばいっすよ魔王様」「え、え、どうしたんすか彼女」「ちよ、なんとかしてくださいっ」

トランプをしていたオークたちが騒さわぎ出した。

「いや、なんとかって。オレもまさか本当に堕おちるとは思わなかったし……」

いやまさか、この映像で堕ちるとは思わなかった。これはいうなれば快樂堕ちではなく絶望堕ちだ。突然の出来事にあたふたしてしまふ。

えつとどうすればよかったつけ？ 確か、下腹部に淫紋を刻むのだったか？ 順序を思い出している、

「早く……しなさい……」

「え？」

だらんと項垂れていたシーナがゆっくりと面を上げ、睨みつけるようにこちらを見つめてくる。

「あなたの魔法で……淫紋とかいうのを刻むんでしょ？ 魔族になれば今よりもっと強くなれるんでしょ……？」

「まあ人間より魔族の方が身体的にも、魔力的にも強いっちゃ強いけど。得てどうすんの？」

「早くしなさい！」

地下牢にシーナの咆哮が響き渡る。「こ、こえー」「なにこの姉ちゃん」「やばいつすよね」オークたちまで不気味なシーナの威圧感に押されている。

「わ、わかった——えーと、確か……」

アーヴィンはシーナの下腹部に手を当てる。腹部を覆うライトアーマーの下にはインナーしか着けていない。そのインナーを少しめくり、直接腹に手を置く。

柔らかくて温かい。こうして触っていると細い腰だというのが直にわかる。

アーヴィンは右手に魔力を集中させた。

——魔族には呪文の詠唱は必要ない。人間の魔法は発声により呪文という意味のある言葉を生み出すが、魔族の魔法の根源はイメージ力だ。頭でイメージした魔法が体内の瘴気を魔法として具現化させる。

今回の場合は闇堕ちの淫紋。イメージはシーナから湧き出る瘴気をシーナ自身の体に着させること。そのための『印』を刻み付ける。

ぼうつ、と掌に淡い赤の光が発生し、その光がシーナの下腹部へと移行する。

「うう……」

小さくシーナが呻く。痛いのだろうか。アーヴィンも初めてやるから、これを受けて人間がどんな痛みを受けるのかわからない。

「ん……あ……はあ……はあ」

シーナの艶めかしい息がアーヴィンの首元に当たる。心なしにシーナの頬がほんのり上気していた。

——ほどなくしてシーナの下腹部にハートマークを基調とした淫紋が刻み付けられた。印の形のデザインは同人誌がモデルだ。デザインの文句は同人誌を描いた人間に言っている。

シーナからほとばしっていた瘴気（さけ）がみるうちにシーナ自身へと溶けていく。やがて黒い瘴気は全てシーナへと吸収された。

「……………どうだ？」

シーナはだらんとしたまま俯（うつむ）いていた。一言も発さない。

アーヴィンがゆっくりと顔を覗き込もうとすると――。

バキンっ！ え？ バキンっ？

一瞬間（いつゆん）の音がわからなかった。次の瞬間にはアーヴィンはシーナに胸倉（むなぐら）を掴みあげられていた。アーヴィンの体が石の壁（かべ）に叩きつけられる。

「スヴェンの下に案内（あんない）しない！」

シーナの瞳（ひとみ）が赤い。赤い瞳は魔族（まぞく）の象徴（しょうちゆう）だ。闇堕（やみおち）ちによる魔族化は成功したようだ。

——いやそれよりも、あなた、両手を鎖（くさり）で縛（しば）られてませんでした？ ——ふとシーナの足元に目をやると無残にも引き千切られた鎖（くさり）が落ちていた。

「うえっ!? 千切ったの!？」

「早く案内（あんない）しない！」

目がマジだ。オークたちなんて牢（らう）の隅（すみ）っこに移動して、三人纏（まと）まってガタガタと震えている。

違う。何かが違う。

闇堕（やみおち）したら魔王様に絶対服従（ぜったいふくじゆう）——ではなかったのか。

胸倉（むなぐら）を締め上げられながらアーヴィンは思った。

——やめときゃよかった。

アーヴィンの翼（つばさ）は人一人抱（かか）えても速度（そくど）が落ちることはない。ただ腕（うで）が痛くなるだけだ。現在（げんざい）アーヴィンはシーナの腹（はら）に手を回（かえ）して抱（かか）きかかえている。

——山を越え東側の人間の領地（りやうち）の上空に着く。そこから数分と飛ばない内に眼下（げんが）に城塞（じやうさい）都市（とし）が見えた。

「あれか。スヴェンが宿泊（しゅくはく）してるっていうアルカティアの街は」

夕方（ゆふがた）、日が西へと沈（しず）む頃（ころ）合い。あと一時間もしない内に人間の領地（りやうち）全体は魔王領（まおうりやう）より早く夜の帳（とばり）が下りるだろう。

「たぶん、スヴェンが泊^{とま}つてる宿はあたしたちが前日に泊^{とま}つたところよ。街の東の方に降りて」

アーヴィンは高度をゆつくりと落としてく。誰^{だれ}かに見られたら大騒^{おおさわ}ぎなので、なるべくバレないように適度に高度を保つ。

「あつ、あそこ！ 降りて！」

レンガ造りの街並み——その一角をシーナが指さした。

アーヴィンは言われるがままにスヴェンが泊^{とま}っているであろう宿の屋上へと降りる。屋上には何本も物干^{ものほ}し竿^{ざお}があつた。普段はここでベッドのシーツを干すのだろう。宿に間違いなさそうだ。

「なあ、何階なんだ？」

屋上からちらつと、下の通りを見下ろす。

人通りは映像で見た時よりも少ない。どうやらピークは過ぎたようだ。それでもちらほらと通行人がいる。

「四階よ。ここから二階下」

「了解」
りようかい

再びシーナを抱え、屋上からベランダへとゆつくり降りていく。二階下のベランダに着

く。カーテンが閉^しまつていた。アーヴィンたちが来るまでに閉めたのだろう。おかげで外にいるアーヴィンたちに気づかれなくて済む。

——さて、どうするか、と思案する。

正直、アーヴィンは『足』として使われただけで、このまま帰っても別に問題ない。けれどシーナのことにも気になるし、せっかく闇墮^{やふ}ちさせたのに、じゃあこれで——と別れるのもなんだか勿^{もち}体^{たい}ない。魔族化した人間なんて見るのは初めてだし、もつと——。

パリンっ！ え？ パリン？

気づくとシーナがベランダの窓ガラスを蹴^け破^{やぶ}っていた。猪^{いのしし}ですかあなたは。

当然だが、中で横になっていたスヴェンとマリナは目を丸くしてこちらを見ていた。声も出ないようだった。

スヴェンはパンイチ姿。マリナはまだ脱^ぬぐ前だったのか、インナーのままだった。

「スヴェン、これはどういうこと？」

シーナが一步を踏みだす。同時にピシっ、と散らばったガラス片^{へん}を鉄^{くろぞこ}の靴底^{くつぞこ}で踏みつぶす。

「し、シーナ？ な、なんで君がここに？ そ、それにそいつはあの時の魔族……」
どうも、こんにちは。あの時の魔族です。

「スヴェン、答えて！ あなたなんでマリナと一緒にいるの？」

これは言い訳できない。パンイチで女とベッドにいることが何を意味するのか。

「ち、違う。こ、これは——そう！ 君を助けに行く作戦会議をしていたんだ！ これから援軍を連れて君を魔王領から奪還しよう……」

「見苦しい言い訳はやめて！ あたし見てたんだから！」

と言うと、ペランダに引き返し、何やら丸いものを片手で掴んで、スヴェンへと見せた。

「この魔法生物で」

シーナが掴んでいたのはキラアイの子機だった。やめたげて！ 子機ちゃん涙目になつてから！

「な、なんだ、その生き物は」

「これが見た映像は本体の魔法生物が投映することができの。これでスヴェンがここで何をしたのか見てたんだから！」

「いや、それは……」

スヴェンが視線を泳がせていると——。

『あの……スヴェンさん、何かありましたか？ そちらでガラスが割れたような音が……』扉の外で誰かがノックをした。ここの宿の従業員だろうか。だとするとこの状況はあま

りよろしくない。アーヴィンがふとペランダから見下ろすと、何人か人溜まりができて、

こちらを指差していた。さすがに目立ち過ぎだ。

「あ、いや、なんでも——」

扉に向かって返事をしようとするスヴェンに——。

「スヴェン！ ちゃんと説明して！ あたしを騙してたの！？」 半年前、山賊にあたしを襲わせて自作自演したっていうのは本当のことなの！？」

畳みかけるように追及するシーナ。

——もう帰ってもいいかな？ アーヴィンは心の中で思った。なんでこんな修羅場を見せられなくてはならないのか。

『大丈夫ですか!? スヴェンさん、入りますよ!』

心配した従業員がマスターキーを使って、部屋に入ってきた。

「な、なんですか……これ？ ま、魔族!？」

男の従業員は現場を見て、軽い混乱状態に陥っていた。

確かに黒い翼を生やした魔族がこんなところにいたらただの襲撃だと勘違いするだろう。あながち間違っていない。

「そ、そうだ魔族……」

スヴェンが何やら呟いた。

「魔族だ！ シーナは魔族に寝返ったんだ！」

ここぞとばかりに叫び出した。従業員も「え？」と目を見開いている。

「み、見ろ！ シーナの瞳は赤！ 赤い瞳は魔族の証！ シーナは魔族になったんだ！」
突然何を言い出すのか、この男は。

しかし、ふと思った。

ここでシーナを魔族扱いし、排斥することはスヴェンにとって何の利になるのか。

答えは簡単だ。スヴェンの『浮気』をなかったことにできる。この場でスヴェンがシーナの言葉を受け入れるというのは同時に浮気を認めるということ。

そんな不貞行為を働いた騎士に——誠実であるはずの騎士に、王都聖騎士団が何の処罰も与えずにいるわけがない。

しかしここでシーナを魔族扱いすれば、シーナの言葉はスヴェンを嵌めるための妄言だと切り捨てられる可能性がある。

人間の魔族に対する負の感情は強い。

アーヴィンがシーナを介抱した時もそうだった。シーナ自身、魔族であるアーヴィンの言葉に一切耳を貸さなかった。

(きたねえ)

つまるところ、保身だ。

スヴェンは聖騎士団から除名されたくないから、婚約者であるはずのシーナを切り捨てた。そういうことだ。

「な、なにを……」

シーナは動揺している。こう切り返されることを想定していなかったのだろう。

畳みかけるようにスヴェンが従業員にこう告げた。

「今すぐ衛士隊と街にいる王都聖騎士団に連絡を！ 魔族が街に攻めてきた！」

一瞬惚けていた従業員は、その言葉で我に返り「は、はい！」と逃げるように部屋から姿を消した。

「スヴェン……あなたって人は……っ」

「うるさい魔族の手先め——そ、そうか！ わかったぞ、貴様はシーナではないな！ 本物のシーナを殺害し、魔族の魔法で成り代わっていたのだ！ だ、団長の娘ならば国の内情を一般騎士より知ることができるからな！」

言いたい放題である。

レイピアを構えようとするシーナの肩に手を置き、アーヴィンはおもむろに前に出た。

「スヴェンっていったか？ 自分の不貞行為ぐらい認めたらどうだ？」

「魔族風情に説教されるいわれはない！」

それはごもっとも。

だが言わずにはいられなかった。正々堂々と戦え、と。別に剣を合わせるだけが騎士ではない。

——そうこうしている間に、ペランダの外がより慌ただしくなった。

（衛士隊が来たな）

国外に対する軍事力である王都聖騎士団と違い、衛士隊は内部の治安維持部隊だ。騎士団ほどは強くないが、厄介なことには変わりない。

あまり騒ぎを大きくしたくない。ここで魔王の力を存分に振るい『フハハ、愚かな人間どもよ！』と魔王らしく蹂躪する——なんてことが許されるのはTRPGの世界だけだ。

できれば穏便に済ませたい。今後も同人誌を買いに王都には行くだろうし、顔が騎士団と衛士隊に知れ渡るのは避けたい。

「スヴェン、あなたがそんな男だとは知らなかったわ。王都聖騎士団一番隊長シーナⅡアルバートの名において、不貞行為を働いたスヴェンⅡバルザットを王都聖騎士団特例条法により拘束します！」

シーナは引くつもりはないらしい。しかしあまりにも無謀だ。

魔王の力があるアーヴィンならいざ知らず、シーナだけでこれから来るであろう衛士隊と王都聖騎士団を相手にするのは無理だ。

シーナが人間なら、スヴェンの不貞行為を暴くことも、戦うこともせずに済むかもしれないが——今のシーナはスヴェンの言う通り魔族だ。

魔族にとってここは敵地。仮にこの場をしのげたとしても、この先、この地で生き残れる保証はない。

（オレの……せいだよな）

最終的にはシーナに促されて闇堕ちさせたとはいえ、魔族にしてしまったのは事実だ。

じゃあ僕帰るんで——と言って一人だけすたこらさつさと逃げるのは後味が悪いし、恰好がつかない。

「魔族がいるというのはここか！」

扉の外に衛士隊が到着した。ざっと見るだけで十人弱はいる。外にもそれ以上いるだろう。

「ち……しゃあねえな」

「え……ちよ、きゃあつ」

アーヴィンはシーナを脇に抱え、ベランダから外へと飛び立った。

「ま、待て！」「魔族を逃がすな！」

仕事熱心な衛士隊のみなさんは上空を飛ぶアーヴィンを必死に追いかけて来るが、無駄だ。

さつさと空へと飛翔したアーヴィンは十分な高度へ達した後、全力で魔王城へ向けて加速した。

あつと言う間に街は遠のき、眼下にはワルドー山脈ふもとの樹海が広がった。

山脈の中腹を越え——頂上付近に達したところで、夕日の光が目飛び込んだ。

「……」

脇に抱えたシーナはぐったりしたまま、何も話さない。あまりにも速く飛び過ぎて気絶でもしたのだろうか。

「お、おいシーナ？——いてっ！」

と顔を覗き込もうとすると、突然、頭をあげられた。顎にシーナの頭部がクリーンヒットしてしまう。

「ゆ——っ」

「ゆ？」

「——つるさない！絶対許さない！あのスケコマシ！あたしが団長の娘だから近づいた？キスもさせてくれない？——人をなんだと思ってるのよおおっ！」

「ちょ、ちょ！暴れんなって！落ちるから！」

シーナは夕日に向かって全力で叫ぶ。

溜まりに溜まった心の膿を声で全て吐き出した。そんな感じである。

ひとしきり叫んだシーナは「はあはあ」と荒々しく息をついていた。ここ上空だから酸欠で窒息するぞ。

叫んでから、シーナはまた項垂れるようにしゅんとなった。

「燃焼したか？」

訊ねると、シーナは独り言のように口を開いた。

「……スヴェンのことはね、本当に信用してたのよ。あたし、十二歳で騎士団学校に飛び級入学したの、その時周りはみんな十五歳。そんな中で友達なんてできるわけない、あたしは学校で孤立した」

自嘲気味にふふつと笑うシーナ。その気持ちは立場が違うが、わかる気がする。

「そのまま独りぼっちで十六で卒業。その年に王都聖騎士団に入って、一年も経たずにあたしは隊長になった——けど、騎士団内でもあたしは学校と同じような気持ちだった」

隊を纏める立場であるシーナと軍を纏める立場であるアーヴィン。

種族は違えど、その胸に秘める思いや気持ちは共感できる。アーヴィンもそうだった。自分の場合は孤独になるのが嫌で、無理やりオークたちを遊びに連れまわしているが、本当の意味で友人と言える人は、一人しかいない。

「そんな時よ。スヴェンだけがあたしを特別扱いしなかった。立場的には部下だったんだけど、年上のスヴェンはあたしに色々よくしてくれた。恋——とは違ったのだと思う。

ただ友人として一緒にいたかっただけなんだと思う。だからスヴェンから告白された時は——正直戸惑ったけど、断ってその関係が崩れるのが怖かったのだと思う」

しおらしくシーナは呟く。

先ほどまで宿で息まいていたシーナとは大違いだ。一日色々なことがあつて疲れた反動が来たのもあるだろう。

——そんなシーナが腕の中でふるふると震えだした。

「そう……あの時も、あの時もあの時も——」

「え？ し、シーナ？」

再びカッと頭を上げ、

「ぜつつつつんぶ、あたしを誑し込むための罠だったのよ！ 最初から全部！ 自作自

演してまで団長の娘の婿についていうステータスが欲しかったのよ！ あいつが許せない以上にそのことを見抜けなかったあたしが許せないいいいっつ！」

キーンと耳鳴りがする。すぐ近くで叫ばないでほしい。

「——いいわ、やってやるわよ」

「……なにを？」

「あんたの軍に入ってやるって言ってるのよ！」

……どうしてそういう結論になったんだ？

スヴェンを許さない！ からあんたの軍に入るといふ考えの道順がわからない。

「入るって、魔族になつて行き場がないから雇ってくださいつていう特殊ツンデレパターンか？」

「意味不明なこと言ってるんじゃないわよ。あんた、元々あたしを魔王軍に入れてこき使うって言ってたじゃない」

「まあ言っただけ」

「こき使われてやるうじゃない。それであんたの軍を纏め上げて、あのスケコマシに復讐するのよ」

それはつまりうちの軍をスヴェンへの復讐の道具にするってことか。

「いや、それはちょっと——」

「うるさい！ 元はといえばあんたのせいなんだからね！ あたしを魔族なんかにさせたから」

「いやいやそれを言うならお前がうちの領土に攻めてきたんだろ」

「あんたがあたしを攫^{さら}って城に連れてったんでしょ！ そもそもあたしたち、あんたから逃げようとしたのに、あんたが魔法で扉^{とびら}を閉じるのが悪いんじゃない」

それは建て付けの問題です。なんて言っても信じないだろうし、こんな不毛な水掛け論をしたところで、シーナが魔族になって、王都聖騎士^き団と敵対した事実は変わらない。

「どちらにせよ、スヴェンはやる気よ。さつきも聞いてたでしょ。あいつが上にあんたとあたしのことを進言すれば、すぐに王都聖騎士団が動くわ。そうなれば戦いは避けられない」

スヴェンの行動次第^{しだい}だが、そうなる可能性を否定できない。

「だからそれまでにあんたの軍をあたしが強くしてやろうって言ってるの。あんたにとっても悪い話じゃないはずよ」

そう言われるとますます否定できない。そもそもこき使う予定ではあったし、本人がやると言ってるなら願^{かな}ったり叶^{かな}ったりだ。

「——ってわけで、今日からよろしく。言っとくけど、あんたに服従する気はないし、あんたのことは憎^{にく}い魔族としか思っ^{おも}てないから」

魔王とすら思ってくれないのか。

はあ、と深くため息を吐^はき、夕日に向かつて顔を上げた。

——今日一日で学んだことがある。

マジメっぽい女がヒステリーを起こすと怖い。